

(様式9)

穏やかな里山風景に呼応する、おおらかな小学校

富山湾に面する内浦の柔和な沈水景観と、低山と丘陵が織りなす緩やかな地形を背景に、私たちは地域特有の豊かなコミュニティと文化を育んできたこの里山里海風景に呼応し、地域と共生する、持続可能な「おおらかな小学校」を提案します。

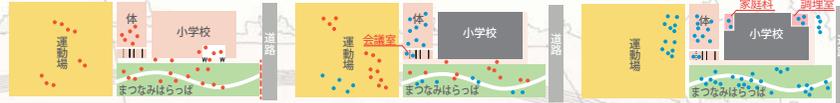


管理運営がしやすい配置計画：学校運営時は、体育館、運動場、「まつなみはらっぱ」は小学校と中学校のみが利用することができます。コンパクトで一體的に計画された校舎は、見通しが良く管理運営が容易に行えます。「はらっぱ」、運動場、体育館は校舎と切り離して一體的に管理運営ができるような配置計画とします。地域のサークル活動（コース、手芸など）に使える会議室は校舎と切り離して利用できるよう「はらっぱ」に面して配置します。「まつなみはらっぱ」は多様な使い方ができる場所です。まつり、休日マルシェ、獅子舞の稽古、相撲大会、町民社会体育大会など、様々な地域の利活用が考えられます。

【小学校運営時】：「はらっぱ」は閉じ、関係者のみ敷地利用可とします。

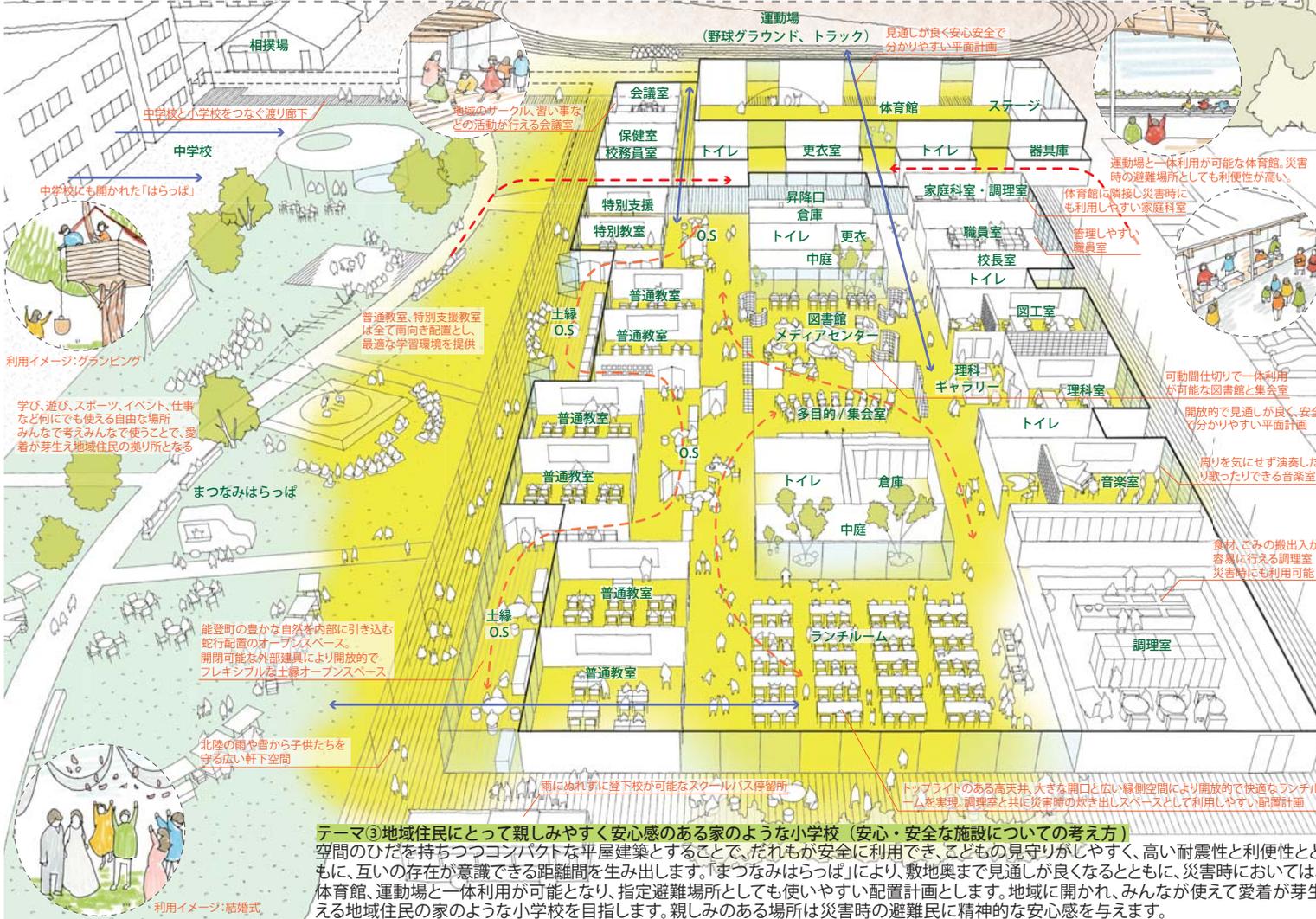
【放課後・休日】：校舎以外の運動場、体育館、会議室、軒下空間を開放します。

【災害時利用】：体育館を物資の拠点として、家庭科室、はらっぱを利用します。



テーマ①豊かな自然にかけられた大屋根の学び舎 (子供たちが誇りをもって学べる環境についての考え方)

コンパクトで一體的、連続的でフレキシブルな建築計画：昨今益々多様化する社会や教育環境に対応するため、様々な居室と共用スペースを連続的かつ一體的に計画し、児童が多様で柔軟な学びを实践できる環境を整備します。使用頻度の高い普通教室とオープンスペースと交互に蛇行させる計画とし、多様な学習形態に対応可能な環境を提供します。子供たちは自由な移動や活動が可能となり、個別学習や協働学習、さらには創造的な活動を促進します。外部と一體的な内部空間：小学校校舎と体育館は、平屋で計画します。各教室群を外周部に配置し外に開くことで、周囲の豊かな自然や環境を内部に取り込みます。豊かな里山里海風景に呼応するおおらかな大屋根空間は、周辺の豊かな自然との一体感を生み出し、子供たちはのびのびと学習活動や学習課題に取り組みることができます。普通教室は学年ごとで隔たりなく一體的に配置し、様々な共用スペースと連続的に計画することで、異学年交流、児童会活動などの様々な活動が容易に行える空間とします。



テーマ②「まつなみはらっぱ」と地域のコアとしての小学校 (地域施設についての考え方)

多様な活動を育む持続可能な共用空間：校舎を敷地北側に配置し、中学校校舎との間に「まつなみはらっぱ」を計画します。小学校の多様な活動の場として利用だけでなく、敷地奥の運動場と体育館を地域につなぎ、「はらっぱ」、運動場、体育館の一体利用を可能にします。「まつなみはらっぱ」の使い方は設計期間中にワークショップを開き、地域のみんで考えます。「まつなみはらっぱ」は、中学校校舎と小学校校舎に囲まれた広場となり、将来的に検討されている中学校移転後の校舎利活用において有効なバッファースペースとして機能します。



ここにしかない建築：校舎にはシンプルな木造架構の屋根や土縁を連想させるオープンスペースなど地域で培われてきた空間・技術を取り込み変換し、次代へと継承するデザインとします。設計期間中にワークショップを開催し、「はらっぱ」の使い方や土縁スペースの仕上げなどについて、地域のみんで一緒に考えていきます。

テーマ③地域住民にとって親しみやすく安心感のある家のような小学校 (安心・安全な施設についての考え方)

空間のひだを持ちつつコンパクトな平屋建築とすることで、だれもが安全に利用でき、こどもの見守りがしやすく、高い耐震性と利便性ととも、互いの存在が意識できる距離間を生み出します。「まつなみはらっぱ」により、敷地奥まで見通しが良くなるとともに、災害時には、体育館、運動場と一体利用が可能となり、指定避難場所としても使いやすい配置計画とします。地域に開かれ、みんなが使えて愛着が芽生える地域住民の家のような小学校を目指します。親しみのある場所は災害時の避難民に精神的な安心感を与えます。



(様式9)

だれもが安心して利用できるコンパクトで分かりやすい建築計画 (敷地利用・動線計画、周辺環境 について)

小学校は計画地北側に配置し、中学校校舎との間に距離を置くことで、各々の校舎の良好な採光と通風を確保します。送迎バス動線、教員と来訪者車両動線は校舎東、北側に計画し、歩車分離による安全性と合理的な動線計画を実現します。広い軒下空間は北陸の雨雪が子供たちを守ります。コンパクトな平屋建築とし、小学校校舎エリアと中学生や地域住民の利用が想定される体育館エリアを明確に分節することで、だれもが容易に利用できる安心で分かりやすい建築計画とします。主要構造部や仕上材に地場産材の杉、アテを積極的に活用し、地域性に配慮し地域の顔となる小学校を目指します。



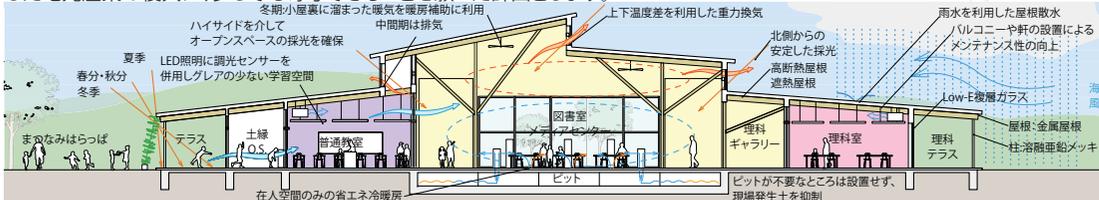
工事中における各動線と周辺環境への配慮: 校舎と体育館を北側に配置し、中学校校舎から距離を取ることで、工事中の埃や騒音の周辺への影響を極力抑え、安全かつ効率的に工事を進められる計画とします。安全に工事が行えるよう、生徒、教員、工事関係車両の動線を明確に分離します。

サステナブルな設備、構造による実現・持続可能な建築計画 (整備コスト及び維持管理コストについて)

バランスの取れたアクティブ&パッシブデザイン: 空調、照明、給湯設備に高効率機器を採用するアクティブデザインに加え、雨水利用、地中熱利用、ピット、重力換気、ハイサイドライトを活用した昼光利用などのパッシブデザインを組み合わせることで、効率的かつバランスの取れたZEBready建築を実現します。

点検、修繕がしやすい塩害に強い木造平屋建築: 海に隣接し、丘陵地の上に位置する計画地は風通しが良いこともあり、塩害の影響が大きいと考えられます。風当たりが少なく、塩害に強い木造平屋建築を提案します。平屋建築はまた、点検、修繕を容易にします。

木造在来組工法を用いた軽快感豊かな構造: 構造種別は基礎部分と防火区画の構造をRC造として、その他は木質構造とします。構造体は、優れた建築構造材である地場産材の杉や能登ヒバ(アテ材)を、できる限り多く用いた木質構造とします。木材の材料供給に懸念はあるものの、地元森林組合と十分協議を重ねながら、大地震と豪雨災害によって危機的な状況にある林業や大工職人をはじめとした地元産業の復興に、少しでも寄与できることを願った計画とします。



一体的でありながら様々な活動の場を提供する、開放的で明るく親しみやすい内部空間



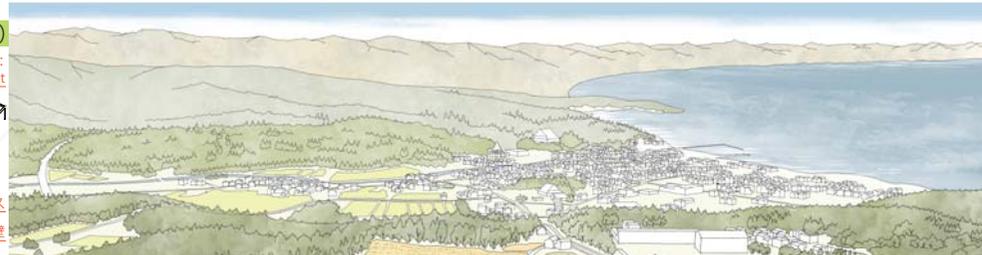
図書室・メディアセンター: ハイサイドライトによって自然光を取り入れ、廊下と一体的なオープンプランとし、立ち寄りやすい開放的な学びと交流の場



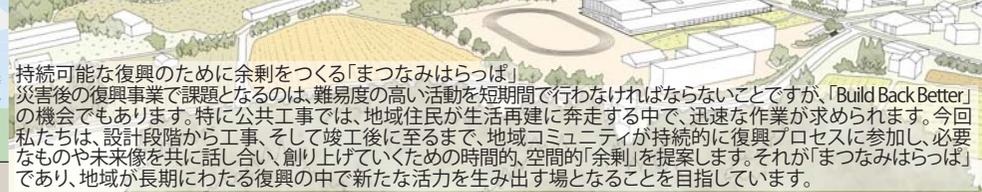
図書室・多目的室・廊下: 図書室と連続し、学びの場所の延長となる廊下と一体的なオープンプランとし、立ち寄りやすい開放的な学びと交流の場



ランチルーム: 中庭によって光を導入し、四季の変化を楽しめるみんなの憩いの場。正方形に近い大きな空間でいろんな活動の展開が容易。奥にある調理室と連携をとりやすい



体育館: 木造トラスと壁面仕上げに県産木材を使用し、温もりのある安心安全な大空間



持続可能な復興のために余剰をつくる「まつなみはらっぱ」: 災害後の復興事業で課題となるのは、難易度の高い活動を短期間で行わなければならないことですが、「Build Back Better」の機会でもあります。特に公共工事で、地域住民が生活再建に奔走する中で、迅速な作業が求められます。今回私たちは、設計段階から工事、そして竣工後に至るまで、地域コミュニティが持続的に復興プロセスに参加し、必要なものや未来像を共に話し合い、創り上げていくための時間的、空間的「余剰」を提案します。それが「まつなみはらっぱ」であり、地域が長期的にわたる復興の中で新たな活力を生み出す場となることを目指しています。